

# 四川省西昌市の発展

—少数民族地域の都市と農村—

四川省西昌市的发展—少数民族区域的城市与农村—

石原 潤・傅 綬寧・秋山元秀編

京都大学大学院文学研究科地理学教室

# 目 次

## 序言

- |                                |       |
|--------------------------------|-------|
| 石原 潤 (京都大学)                    | … 1   |
| 发挥区位优势 建设区域中心城市                |       |
| 张 小力 (西昌市市長)                   | … 3   |
| 地理的位置の組み合わせの優位を活かし区域の中心都市を建設する |       |
| 張 小力 (西昌市市長) [秋山元秀訳]           | … 9   |
| 改革開放下における西昌市の都市化と都市構造          |       |
| —特に市街地内の農村地区について—              |       |
| 秋山元秀 (滋賀大学)                    | … 17  |
| 西昌市城区景观格局的变化与景观体系建设研究          |       |
| 方 一平 (中国科学院成都山地所)              | … 33  |
| 西昌市城都市部及び農村部の集市                |       |
| 石原 潤 (京都大学)                    | … 48  |
| 西昌市小城镇建设现状与发展模式                |       |
| 徐 云 (中国科学院成都山地所)               | … 100 |
| 西昌市における観光開発の現状と課題—民族観光を中心に—    |       |
| 松村嘉久 (阪南大学)                    | … 112 |
| 西昌市観光农业发展态势研究                  |       |
| 李 学东 (中国科学院成都山地所)              | … 132 |
| 西昌市农业的发展特点与地域差异                |       |
| 傅 绥宁 (中国科学院成都山地所)              | … 143 |
| 少数民族地域の農家による市場經濟への対応           |       |
| —西昌市四合郷彝族集落の事例をめぐって—           |       |
| 小野寺 淳 (横浜市立大学)                 | … 153 |
| 西昌市贫困地区の脱贫与发展                  |       |
| 吴 敏 (中国科学院成都山地所)               | … 174 |

# 序 言

石原 潤（京都大学）

本書は日中共同研究「中国四川盆地における生活空間の変容に関する研究」の第3冊目の調査報告書である。

本研究の目的は、1978年以後の改革開放政策下において、とりわけ近年の市場経済化の下にあって、中国内陸部の都市及び農村がどのような発展をとげ、それが住民の生産・消費の諸活動にどのような変化をもたらしているかを明らかにすることにある。

近年の中国では、都市の発展と拡大が極めて顕著で、再開発が進展し、高層住宅や商業施設の拡充が著しいが、他方ではさまざまな環境問題や景観破壊などの問題が発生し、「単位」の中でも住宅の私有化が進み生活の場も急変している。一方、農村部でも、農業の商品経済化や郷鎮企業の発展が進み、農民所得の向上、自由市場の活性化、小城镇の発展が顕著であるが、地域によっては郷鎮企業の発展も緩慢、農業の商品経済化も部分的であり、むしろ出稼ぎ者の増加や観光産業への依存が認められ、いわゆる「貧困地区」も残っている。

従来、このような近年の変化に関する研究は、主として、経済開発の進んだ沿海部（いわゆる「東部」）について行われてきた。開発が遅れている内陸部、特に「西部」と呼ばれる最内陸部に関する研究は限られている。本書は、「西部」に属する四川省南部の山間地域に位置し、少数民族彝（イ）族地域の中心都市として発展してきた、西昌市とその周辺農村とを対象に、現地調査に基づき、上記のテーマを追求したものである。本書を一読された読者は、市場経済化の波が、「西部」とされる四川省の山間部・少数民族地域にまで、激しく押し寄せていることを理解されよう。本書は、不十分な点を含んではいるが、「西部」開発を進めようとしている中国の政策担当者、あるいはそれを理解ないし援助しようとしている日本の関係者に、いくばくかの情報提供の役割をはたそうとするものである。

本書のための現地調査は、2001年8月10日から約1ヶ月間、以下のメンバーによって実施された。

## 日本側メンバー

石原 潤 京都大学大学院文学研究科 教授  
秋山元秀 滋賀大学教育学部 教授  
小野寺淳 横浜市立大学国際文化学部 助教授  
松村嘉久 阪南大学国際コミュニケーション学部 助教授

## 中国側メンバー

傅 綬寧 中国科学院成都山地災害・環境研究所 教授  
方 一平 中国科学院成都山地災害・環境研究所 助教授  
吳 敏 中国科学院成都山地災害・環境研究所 助手  
李 学東 中国科学院成都山地災害・環境研究所 助手  
徐 雲 中国科学院成都山地災害・環境研究所 助手

本書は、以上の共同調査に基づき、資料の一部を共有しながらも、各自がテーマを分担して、分析・考察・執筆を行った諸論文からなっている。なお、巻頭には、西昌市長の張 小力 氏の寄稿をもいただいたので、その日本語訳をも掲載している。

本共同研究は、財政的には、日本政府文部科学省の 2001 年度科学研究費基盤研究（A）（2）「中国四川盆地における生活空間の変容に関する研究」（課題番号：国 11691018、研究代表者：石原 潤）によって全面的に支えられたものである。記して感謝の意を表したい。調査にあたっては、中国科学院成都山地災害・環境研究所（山地所）、西昌市人民政府所属の諸部局、西昌市所属の各郷鎮政府、各郷鎮所属の村民委員会等の協力を得た。特に西昌市副市長の揚仁文氏には、一方ならぬご配慮を頂いた。また、多くの集貿市場・観光施設・農家楽の関係者や、都市及び農村住民が、聞き取りに快く応じて下さった。さらに、西昌市人民政府の吳 犁 氏は、通訳として協力をいただいた。これらの人々及び機関に対して、深甚の謝意を表したい。

# 西昌市における観光開発の現状と課題

## —民族観光を中心に—

松村 嘉久(阪南大学)

### 1. 四川省における観光政策の展開

#### (1)四川省観光の概観

四川省は中国でも観光資源に恵まれたところであり、数多くの観光資源がすでに制度化されている。主なものを列記すると、9国家クラス風景名勝区、37 国家クラス・省クラス自然保護区、56 国家クラス・省クラス森林公園、7国家クラス歴史文化名城、24 省クラス歴史文化名城などがあり、ユネスコ世界遺産も4ヶ所(九寨溝の自然景観および歴史地区・黄龍の自然景観および歴史地区・峨眉山と楽山大仏・青城山と都江堰灌漑施設)、中国優秀観光都市も3ヶ所(峨眉山市・都江堰市・樂山市)指定されている。四川省政府は観光開発にも積極的で、四川省の観光スポットは国家旅游局より10ヶ所(峨眉山風景名勝区・楽山大佛景区・九寨溝風景名勝区・黄龍風景名勝区・都江堰景区・青城山景区・宜賓蜀南竹海風景名勝区・瀘定海螺溝冰川森林公園・広漢三星堆博物館・成都武侯祠博物館)が最高ランクのAAAA評価を受けており、6ヶ所(洪雅瓦屋山・炉鼎玉蟾山・自貢恐竜博物館・自貢中国彩灯博物館・自貢塩業歴史博物館・西昌衛星発射基地)はAA評価を受けている<sup>2</sup>。なお、本章において斜体字で記載されている観光スポットや地名などは、後述する涼山彝族自治州関連のものである。

しかしながら、国際観光・国内観光ともに客数と観光収入は、他の観光先進省と比較するとあまり芳しくなく、豊かな観光資源を活用しきれていないとの焦りを、四川省政府はつのらせてきた。1999年の国際観光客数は37.34万人回で観光外貨収入は9,721.84万ドルだった。主なゲスト国は、日本(3.74万人回)、シンガポール(3.24万人回)、アメリカ(2.04万人回)、タイ(2.15万人回)、マレーシア(0.98万人回)で、以下はドイツ、イギリス、フランス、韓国、オランダと続く。国際観光客の四川省内の目的地は、①成都市(22.12万人回、外貨収入6,805.95万ドル)、②阿壩チベット族チン族自治州(8.58万人回、外貨収入1,527.07万ドル)、③樂山市(3.38万人回、外貨収入671.61万ドル)の順になっている<sup>3</sup>。実にこの3地域への国際観光客数で四川省全体の9割も占めている。四川省には1999年末で144の県級行政単位が存在するが、そのうち外国人観光客を受け入れている対外開放都市はわずか58ヶ所(1999年2月現在)に過ぎない<sup>4</sup>。四川省の国際観光が伸び悩んできた原因のひとつは、こうした対外開放の遅れにある。

一方で、1999年における四川省への国内観光客は5,020万人回、国内観光収入は213.92億元で、国際観光収入とあわせた観光総収入は222億元になり、四川省GDPの5.2%に達した。国内観光客の観光目的地は、①成都市(2,485万人回)、②綿陽市(374万人回)、③樂山市(304万人回)、④徳陽市(203万人回)、⑤遂寧市(198万人回)、⑥涼山彝族自治州(158万人回)、⑦自貢市(141万人回)、⑧宜賓市(132万人回)、⑨阿壩チベット族チン族自治州(131万人回)、⑩瀘州市(127万人回)、以下は、達州市(113万人回)、南充市(100万人回)、広元市(94万人回)、内江市(87万人回)、攀枝花市(81万人回)、資陽地区(74万人回)、巴中地区(64万人回)、広安市(56万人回)、眉山地区(47万人回)、雅安地区(42万人回)、甘孜チベット族自治州(3.9万

人回)の順になっている<sup>5</sup>。国内観光でもやはり省都・成都市が突出しているものの、国際観光と比較するなら、国内観光客の観光目的地選考は多様であり、四川省における観光産業の成長は、国際観光よりも国内観光に支えられてきたと言ってもよからう。

2000年になると、国際観光客数は46.2万人回で観光外貨収入は1.2億ドルに、国内観光客数は5,401.5万人回で国内観光収入は248.1億元に、観光総収入は258.1億元に増加した。2001年にも、国際観光客は57.5万人回で観光外貨収入は1.7億ドルに、国内観光客は6,334.7万人回で国内観光収入は300.2億元になった。こうした伸び率は他の観光先進省と比較すると見劣りするが、四川省観光が近年着実に成長しつつあることは事実である。観光客と観光収入が増加した要因には、中国において国内観光が一般化してきたこと、四川省政府が観光計画を策定して積極的な観光政策を展開してきたことなどが挙げられる。

## (2)四川省における観光政策の展開

四川省で最初に制定された観光政策は、1993年3月に発布された四川省人民政府『关于加速我省旅游业发展有关问题的通知(以下、1993年通知と略す)』である。中国の省級行政区のなかでは、陝西省(1985年)、江西省(1989年)、遼寧省(1989年)、吉林省(1991年)、福建省(1992年)、雲南省(1992年)に次ぐ第6番目の観光政策であった。ここでは「大旅游」観念の樹立、「一業挙、百業興」認識の向上、「以旅游養旅游」方針、観光振興のための優遇政策の実施、観光発展基金の開設、省級観光リゾート区の建設などが提議され、各級政府で観光発展計画を国民経済建設と社会発展計画に編入することと、観光資源の優劣を発揮して観光大省を建設することが目標に掲げられた。

1998年6月には省委・省政府による『关于加速旅游业发展的决定(以下、1998年決定と略す)』が出された。ここでは、世紀を跨いだ観光発展戦略として「培育支柱产业、建設旅游大省」を掲げ、対外的な宣伝促進を強化して、四川省観光地の知名度向上を試みる内容であった<sup>6</sup>。1998年決定を受けて、翌1999年5月に『四川省旅游市场拓展费征收管理暂行办法』が発布され、「取之于旅游企業、用之于旅游企業」の原則に基づいて、四川省観光の宣伝・販売促進のための財源が確保された。

1998年決定を具体化すべく、1999年に『四川省旅游发展总体规划(以下、四川観光総合計画と略す)』が策定され<sup>7</sup>、同年4月に四川省人民政府は、『关于实施四川省旅游发展总体规划的通知』(以下、1999年通知と略す)を全省の各地・各部門に通達する。2000年9月に開催された全省旅游工作会议では、中共四川省委・四川省人民政府『关于加快培育旅游支柱产业建设旅游经济强省的决定』(2000年決定と略す)が審議検討され、2000年11月に公布された。四川観光総合計画・1999年通知・2000年決定は互いに深く関連しあつた政策であり、筆者はこのうち2000年決定の全文を入手したので、それをもとに四川省の観光発展戦略を見ていきたい。

2000年決定の冒頭では、四川観光を發展させるにあたって、中国共産党と人民政府の責任感・緊迫感・使命感が何よりも重要であると強調されている。2000年決定で掲げられた四川省の観光発展戦略は二段階に分けられており、「两条主線、三個品牌、四条精品線路(二つの方向性、三つのブランド、四本の優秀な観光ルート)」を骨子としている。2000年から2005年までの第一段階では、四川省を自然生態観光と歴史文化観光の目的地(二つの方向性)に育てあげ、観光産業を国民経済の支柱産業に育成し、観光資源大省から観光経済大省への飛躍を遂げることが掲げられた。第二段階は2006年から2010年までで、観光産業をさらに振興して、観光経済大省から

観光経済強省へと飛躍することが掲げられている。

四川省観光のイメージを樹立するための三つのブランドには、国宝のジャイアントパンダ、ユネスコ世界自然遺産の九寨溝、古代蜀文化の精華である三星堆遺跡が挙げられており、前二者で自然生態観光を、最後の二者で歴史文化観光を、対外的にアピールすることになっている。四つの優秀観光ルートには、成都を起点として、①九寨溝—黄龍—大草原—羌寨奇山異水：藏羌（チベット族チャン族）風情観光ルート、②樂山大佛—峨眉山—三蘇祠—仙女山：仏教文化・長寿文化・休日リゾート観光ルート、③都江堰—青城山—臥龍ジャイアントパンダ自然保護区—四姑娘山—蜂桶寨：生態観光ルート、④自貢恐竜—宜賓蜀南竹海—瀘州仏宝：観光リゾートルートが選ばれている。2000年決定には具体的な数値目標も示されており、2010年までに観光総収入をGDPの14%まで引き上げるとされている。

以上が2000年決定の概略であるが、2000年決定には観光スポット開発・観光都市開発の優先順位も明記されている。観光スポット開発では、2003年までに九寨溝・黄龍・峨眉山・樂山大佛・都江堰を、2005年までに臥龍ジャイアントパンダ自然保護区・三星堆遺跡・四姑娘山・西嶺雪山・蜀南竹海などを、2010年までに海螺溝冰川・自貢恐竜公園・劍門蜀道・江油李白故里・稲城亞丁・瀘沽湖・螺髻山・王朗自然保護区・閬中古城・大邑劉氏莊園・瀘州佛宝などを世界レベルの観光地に育成するとされている。一方、観光都市開発では、2005年までに成都・樂山を国際的知名度の観光都市に、峨眉山・都江堰・錦陽・徳陽・自貢・宜賓・攀枝花・雅安・西昌・広漢・崇州・閬中などを全国的知名度の観光都市に、2010年までに成都・樂山・峨眉山・都江堰を国際観光都市に育成するとされている。

2000年決定では四つの優先観光開発地域も示された。第一は成都ゲートウェイ観光地域で、ジャイアントパンダの里・歴史文化名城（成都）・三国志蜀文化を特色とした観光開発を実施し、都市観光・リゾート・ビジネス・会議・展覧会の目的地として育成するとされている。第二は川西自然生態観光地域で、九寨溝・黄龍・四姑娘山・海螺溝・稲城亞丁・蜂桶寨などの自然生態観光開発に重点をおき、民族文化と自然生態観光・リゾート・探検を融合させた観光目的地を目指している。第三は樂山—峨眉山観光地域で、仏教文化・自然景観・温泉リゾートを特色として、中国仏教文化・観光・休日リゾートを併せもった観光目的地に育成するとされている。第四は自貢—宜賓蜀南竹海観光地域で、自貢・宜賓・瀘州を中心として、恐竜文化・塩業文化・彩灯文化・竹文化・酒文化を特色とした休日観光目的地への育成が試みられる。

2000年決定では、観光振興と関連して交通網の整備も盛り込まれた。第一に強調されているのは省内航空網の整備で、2002年に九寨溝・黄龍空港の開港が、2004年に攀枝花空港の開港と康定空港の着工が計画されている。主要な観光地をつなぐ道路交通網では、都江堰—臥龍—汶川、樂山—宜賓の高速道路化、松潘—九寨溝、川主寺—黄龍—丹雲峽—平武、小金—蜂桶寨—宝興—雅安、紅原—瓦切—川主寺、小金—丹巴—塔公—康定—瀘定—二郎山、宜賓—蜀南竹海、西昌—瀘沽湖、広元—青川—平武などの整備も計画されている。

### (3)四川省方式の観光開発手法

四川省政府は四川観光総合計画を発表したが、莫大な観光開発資金をどのように捻出するかが最大の問題となっていた。2001年2月に四川省旅游局は、四川省内の十大観光スポットの開発経営権を、合資・合作・租賃承包（貸し出し請負）などの方式で民間企業などに譲渡して、観光開発資金を捻出する方針を発表した<sup>3</sup>。対象となった十大観光スポットは、①三星堆遺跡、②九寨

溝国家森林公园、③四姑娘山風景区、④稻城亞丁生態景区、⑤青城山磁懸浮旅游列車工程、⑥劍門三国蜀道景区、⑦涼山中華航空博覧園、⑧自貢恐竜王国公園、⑨閬中古城の保護・開発、⑩跑馬山康巴文化旅游区であった。

この試みは、四川省政府や地元政府が上記観光スポットの所有権と統一協調権を保有するという大前提のもと、開発経営権を民間企業などに一定期間譲渡するもので、「政府主導、企業運作(政府主導のもと、企業が運営する)」の四川省方式と喧伝された。観光開発に参入する企業には、開発経営権という名目で40年間の土地使用権が与えられ、税制面での優遇政策も享受できる。いわば都市部における不動産開発の手法をそのまま観光開発に適用する試みである。

こうした観光開発手法が打ち出された背景には、「碧峰峽モデル」というお手本が存在した。碧峰峽は四川省雅安市にある省クラスの風景名勝区である。1998年1月に雅安市政府は碧峰峽の開発経営権を成都の民間企業である万貫集団に譲渡し、その後の観光開発が「大成功」して著名な観光地に成長したとされる事例である。この他に四川省内においてはすでに、海螺溝開発で国有企業に、臥龍ジャイアントパンダ自然保護区開発で沿海地域の株式会社に開発経営権が譲渡され、観光開発が「成功」したとの評価を得ていた。

風景名勝区や自然保護区の開発経営権を企業に譲渡するという行為は、関連する法律類を厳密に読むならば適法性に問題があり、短期的な投資回収を重視する企業による観光開発が乱開発・景観破壊・自然破壊を招きかねないとの危惧は、如何に政府主導が大前提とはいえ拭いきれない。しかしながら、こうした危惧とは裏腹に、四川省旅游局は十大観光スポットと同時に、蜀南竹海・峨邊黒竹溝・松藩古城など大小180項目余りの観光スポットについても、開発経営権の対外譲渡を募集すると発表した。

この影響は発表後すぐに四川省各地で出はじめており、十大観光スポットの先陣を切って、阿壩チベット族チャン族自治州政府と四川省の民間投資企業である漢龍集団が共同で、「四姑娘山旅游開発股份有限公司」(前者が30%、後者が70%の持ち株率)を設立して、国家クラスの四姑娘山風景名勝区の開発経営権が事実上譲渡された<sup>9)</sup>。

## 2. 四川省観光発展戦略における涼山彝族自治州の位置づけ

### (1) 涼山彝族自治州の概観と観光事情

涼山彝族自治州は四川省の西南部に位置しており、雲南省と隣接している。同自治州の面積は60,115平方kmで四川省総面積の10.6%を占め、おおよそ四国と九州をあわせたくらいの広さである。州都は西昌市に置かれており、1市(西昌)・16県(木里・塩源・徳昌・会理・会東・寧南・普格・布拖・金陽・昭覺・喜徳・冕寧・越西・甘洛・美姑・雷波)の行政区画に分けられている。このうち10県が国定貧困県、1県が省定貧困県、1県が州定貧困県に指定されている。1998年現在、同自治州の総人口は390.08万人、そのうち少数民族人口は179.68万人で総人口の46.1%を占めている。少数民族のなかでは彝族人口が最も多く1998年現在で165.9万人、彝族に次いで多いチベット族人口は5.79万人であり、少数ながらリス族・モンゴル族・パイ族などもある。

州都の西昌市は総人口53.1万人(1998年末現在)で少数民族人口は9.8万人、少数民族人口のおおよそ8割は彝族で、残りはほとんどが回族である。西昌市の少数民族比率は15.5%程度と、涼山彝族自治州の他の県と比較すると低い。古来より南方シルクロードの重要拠点であった西昌は、城壁に囲まれた漢族の街として発展してきたと言える。省クラスの歴史文化名城である西昌市旧市街では2000年に南門が修復され、現在旧城南側の順城街と上西街との間で城壁修復工



事が行なわれている。西昌市では今後も投資を誘致して、明清期の町並みを復元した仿古(古きを真似る)街を建設する予定である。また、歴史文化名鎮に指定されている西昌市礼州鎮でも、「仿古」方式で昔の町並みを復元する計画がある。なお、西昌は海拔高度が高く天候に恵まれ月がよく見えることから「月城」、昆明と対比して「小春城」、衛星発射基地が近くに立地することから「東方のヒューストン」などといった異名でも知られている。

涼山彝族自治州の観光統計を紹介するなら、1998年に同自治州を訪問した中国内外の観光客数は175万人回、そのうち国際観光客はわずかに0.311万人回で、観光総収入は同自治州GDPの約3%に相当する2.3億元だった<sup>10</sup>。1999年の統計では、観光客総数こそ226.7万人回と増加するが、国際観光客は0.26万人回と減少している<sup>11</sup>。中国では内需拡大のため国内観光を奨励すべく、春節(旧正月)・五一(メーデー)・十一(国慶節)と年間三回の長期休暇が制度化されてきた。涼山彝族自治州ではこの三回に加えて、火把節(旧暦6月24日前後)と彝族年(西暦11月20日前後)といった長期休暇も加わる。なかでも学生たちの夏休みと重なる火把節が、最も集客力のある長期休暇となっている。

観光統計からも明らかなように、涼山彝族自治州の国際観光はまだ萌芽段階にある。同自治州で国際観光振興が遅れてきた最大の理由は、四川省レベルと同様に対外開放が進展しなかったことにある。西昌市は1986年に対外開放されていたが、1999年2月末現在でわずかに1市・4県(西昌市・会理県・寧南県・普格県・布拖県)しか対外開放されていなかった。1999年には雷波・美姑・金陽・木里の4県の対外開放が國務院に申請され<sup>12</sup>、同自治州所轄の縣市は2001年春になってようやく全面開放された。つまり、国家旅游局が推奨してきた同自治州の滄沽湖(塩源県管轄)や西昌衛星発射基地(厳密には冕寧県管轄)に、外国人観光客は訪問できないという状態が21世紀まで続いていたことになる。

近年になって、涼山彝族自治州政府が観光開発に邁進するようになったのには、大きく四つの理由が考えられる。第一の理由は、1997年に長江中下流域で発生した大洪水を受けて、長江上流域における天然林伐採が全面禁止されたことにある。例えば、国定貧困県の美姑県は典型的な林業財政県で、財政収入の80%が林業関連からもたらされてきたが、天然林伐採の全面禁止で財政収入が激減し、その代替産業としてにわかに観光産業が注目された<sup>13</sup>。国家旅游局の観光プロモーション・「1999中国生態環境遊」でエコツーリズム開発への道が開けたことから、林業の代替産業としての観光産業はいわばお墨付きを得た形となっている。第二の理由は、既述したように四川省レベルでの観光発展戦略が確定し、涼山彝族自治州でも後述する総合的な観光計画が策定されたことにある。第三の理由は、西部大開発と扶貧(貧困撲滅)運動が本格的に動き出したことで、以前よりも豊富な資金投入が見込めるようになったことにある。第四の理由は、同自治州と隣接する雲南省側の少数民族地帯で観光産業が急速に発達したことにある。

## (2) 涼山彝族自治州観光の位置づけ

さて、第1章では2000年決定をもとに四川省の観光発展戦略を概観したが、そのなかで涼山彝族自治州がどのように位置づけられているのか確認しておきたい。第一に、基本路線である「兩条主線、三個品牌、四條精品線路」のなかに、涼山彝族自治州関連の観光スポットは全く含まれていない。この基本路線はユネスコ世界遺産に認定された観光資源や知名度の高いものを中心に構成されている。一方、観光スポット開発・観光都市開発のなかには、滄沽湖・螺髻山と西昌市が含まれているものの、四川省内での最優先順位は与えられていない。四大優先観光開発地域とと

もに、民族風情・航空科学技術・療養リゾートを特色とした攀西地区などの新興観光地域の育成も実施すると発表されたが、凉山彝族自治州はここに含まれており、やはり最優先順位は与えられず第二優先集団に属している。既述した四大優秀観光ルートでも第二優先集団が記されており、①海螺溝冰川—跑馬山—稻城亞丁：自然生態観光カンパチベツ族文化観光ルート、②西昌邛海—航天城—螺髻山—閬中：古城歴史文化基地観光ルート、③江油李白故里—劍門蜀道：三国文化観光ルート、④劉氏庄園—西嶺雪山：川西民俗・生態観光ルートが挙げられたが、凉山彝族自治州は②に属している。道路交通網の整備計画では、四川省西部のチベツ族地帯が重視される傾向にあるが、凉山彝族自治州内でも西昌—瀘沽湖間の道路整備が盛り込まれた。以上のことから、四川省全体の観光発展戦略において、総じて凉山彝族自治州は最重要視されているとは言い難い状況にある。

また、優先観光開発地域の第一に成都ゲートウェイ観光地域が挙げられていることから推察できるように、四川省の観光発展戦略では成都をゲートウェイとして想定している。しかしながらもう一方で、西南中国では隣接する省級行政区間の観光協力の強化も模索されている。西昌市は成都から直線距離にして 378 km 離れており、雲南省の省都・昆明の方が 315 km と若干ながら地理的には近い。凉山彝族自治州は雲南省に隣接することもあって、雲南省観光と四川省観光をつなぐ観光拠点としての役割が期待されている。こうした試みはすでに進展しつつあり、例えば、四川省も参加する「六省区市七方経済協調会議」では、しばしば観光ルート網の整備協力に向けた議論がなされてきた。その成果として、西南中国の省級行政区を跨いだ観光ルートがいくつか推奨されており、「大西南黄金旅游圈」を構築すべきであると合意され、『西南地区区域旅游发展规划纲要』が編成されつつある<sup>14</sup>。凉山彝族自治州における観光発展戦略は、雲南省観光と連動する観光ルートの設定と雲南省からの観光客の取り込みに活路を見出すしかなかろう。

民族観光と関連して言及するなら、凉山彝族自治州は中国で最大の彝族地帯であるにもかかわらず、四川省レベルの観光発展戦略において、同自治州の民族観光はほとんど言及されていない。四川省レベルでは「最後のシャングリラ」と喧伝される四川省西部のチベツ族・チャン族地帯の民族観光が強調されている。雲貴高原に広く分布する彝族は、四川省独自の少数民族とは認識され難い。むしろ多くの中国人は民族観光の最先進省である雲南省の少数民族と認識している。加えて、自然生態観光と歴史文化観光の振興を二大目標に掲げたことから、雲南省イメージと重なる凉山彝族自治州の彝族はもれ落ち、四川省西部のチベツ族地帯こそが、雄大な自然景観と融合した四川省独自の民族観光資源と認知されたのではなかろうか。何かと問題の多いチベツ自治区観光の代替地としても、四川省西部は将来性のある民族観光資源であり、四川省レベルでの観光発展戦略でも高い優先順位が付けられたと思われる。

次に、国家旅游局が 1992 年から毎年実施してきた観光プロモーションにおいて、凉山彝族自治州がどのように取り扱われてきたのか確認しておきたい。凉山彝族自治州が最初にプロモーション対象となったのは、「1995 民俗風情游」の「西南民族風情」であり、凉山彝族風情・瀘沽湖が初めて推奨された。瀘沽湖は雲南省と四川省が共同で管轄する高原淡水湖であるが、この時は雲南省ではなく四川省の観光地として紹介された<sup>15</sup>。「1996 中国度假休闲游」においても、同自治州は「衛星基地游」と銘打って、西昌衛星発射基地と彝族の年中行事である火把節が推奨された。「1997 中国旅游年」の「西南少数民族風情游」においても、凉山彝族風情・瀘沽湖が四川省の観光地として推奨された。

こうした観光プロモーションは中国の内外を対象としていたが、凉山彝族自治州の観光資源とし

ては、彝族の民族文化・瀘沽湖・西昌衛星発射基地・火把節の四つが紹介されてきた。しかしながら、例えば、同自治州の日本での知名度は低く、管見の限りにおいて唯一、『地球の歩き方 104: 雲南・四川・貴州と少数民族 2000～2001 年版』(ダイヤモンド・ビク社、2000 年)で州都・西昌市が紹介されているのみである。ただし、このガイドブックでも、瀘沽湖観光は西昌ではなく雲南省のところで紹介されており、火把節も西昌を紹介する記述のなかに一切なく、雲南省の石林と大理のところで紹介されている。

### 3. 凉山彝族自治州の観光発展戦略

#### (1) 凉山彝族自治州の観光発展戦略の策定

凉山彝族自治州の観光発展戦略が定まるまでは紆余曲折の経緯があり、様々な観光発展戦略が提案されてきた。同自治州政府が観光発展戦略を策定するに際して最初に起こしたアクションは、雲南省への観光視察団の派遣(1999 年6月)であった。民族観光の先進地帯である雲南省と凉山彝族自治州は隣接しており、地理的環境・民族構成・人的資質・経済発展状況も似ているため、同自治州の観光開発の手本とするには雲南省視察が最適であった。雲南省の麗江・大理・楚雄・昆明などを訪問して回った視察団は、雲南省の観光ルートや観光施設の整備が画期的に進展していることに驚くが、凉山彝族自治州の観光資源を総合的に判断すると、インフラ整備面で大きく遅れこそするものの、必ずしも雲南省の観光資源に劣っておらず、四川省政府の指導のもとで凉山観光計画を早急に策定すべきであるとの結論をまとめた<sup>16</sup>。これ以降、同自治州観光の独自性を打ち出すべく、様々な観光発展戦略が『凉山日報』紙上などで提案されていくことになる。

こうしたなかで民族観光と絡んで興味深いのは、民族文化を集中的に展示する施設の建設、民族文化を体験できる民族観光村の建設、彝族や摩梭人といった少数民族の伝統的な年中行事の観光イベント化といった流れが形成されていったことであろう。例えば、初期の提案では、西昌市内の邛海周辺に「中国彝族文化城」という民族テーマパークを建設し、西昌市近郊に彝族民族観光村を建設し、西昌市のみならず普格県・布拖県などでも火把節を組織的に行うべきとされた<sup>17</sup>。なお、彝族民族観光村の具体的な候補地には、西昌市四合郷、西昌市大箐郷、西昌市磨盤郷、普格県五道箐郷、普格県德育郷などが挙げられている。このうち筆者は西昌市の四合郷と大箐郷を訪問したが、2001 年夏現在で民族観光開発は計画段階にあり、具体的な建設作業は着手されていない。年中行事を行政主導で組織的に実施して観光イベント化することに関しては、彝族の火把節や摩梭人の成丁礼節などはもとより、彝族をテーマとした文化節・芸術節、摩梭人をテーマとした摩梭文化節・摩梭民間芸術節・摩梭人走婚民俗節などのイベントを打ち出すべきなどの提案もなされている<sup>18</sup>。凉山州旅游局の王英副局長も2000年の観光開発の重点項目として、民族文化を集中的に展示する「彝族山寨」の建設を第一に挙げている<sup>19</sup>。民族テーマパークの建設構想と少数民族の年中行事の観光イベント化は、雲南省を視察したことにより触発された可能性が極めて高い。

こうした動向と並行して、1999 年 11 月、西昌市にて『凉山州旅游发展总体规划』(以下、凉山観光総合計画と略す)策定に向けての最初の会議が開かれ<sup>20</sup>、専門家による野外調査を踏まえた報告会議が1999 年 12 月に開かれた<sup>21</sup>。2000 年2月の凉山彝族自治州人民政府主催の観光文化座談会では、凉山観光総合計画が策定される前提のもと、同州の党委員会と人民政府が西昌市域海河流域に火把広場と民族テーマパーク・「中国彝族第一村(仮名)」の建設をすでに決定していることが明らかにされた<sup>22</sup>。凉山観光総合計画に関しては、邛海湖畔の邛海賓館にて2000年

7月に最初の審議会が開催された<sup>23</sup>。2000年末に西昌市内で開催された全州旅游工作会議では、最終審議段階にあった凉山観光総合計画の実施が確認されるとともに<sup>24</sup>、中共凉山州委州人民政府『关于加快培育支柱产业建设旅游经济强州的决定』に関しても意見が交わされた<sup>25</sup>。

凉山観光総合計画の実施に向けて、隣接する諸地域との協力体制の構築も進展する。2001年1月、攀枝花市で開催された四川雲南5市地州経済合作区第一次会議では、昆明市・楚雄彝族自治州・麗江地区(以上は雲南省所轄)・凉山彝族自治州・攀枝花市(以上は四川省所轄)の代表団が一同に会して「加強合作、共謀發展」をテーマに協議し、第十次5ヶ年計画において、交通網建設・インフラ建設・観光發展・市場開拓などで互いに協力体制を築くことが確認された<sup>26</sup>。一方で、既述した四川省方式の観光開発手法と同様、凉山州旅游局は凉山観光総合計画がほぼまとまった2001年2月に、凉山旅游投資誘致項目検討座談会を開いて、同州内の12観光スポットについて、開発經營權の譲渡も含めて中国内外に観光投資の誘致を呼びかけると発表した<sup>27</sup>。発表された観光スポットは、①西昌航天博物館、②凉山民族風情園(民族テーマパーク)、③螺髻山風景区、④凉山奴隸社会博物館、⑤雷波馬湖風景区、⑥喜徳温泉度假村、⑦喜徳小相隣原始森林公園、⑧西昌花卉基地及び生態農業園、⑨西昌邛海度假区、⑩二灘庫区休日観光ルート整備、⑪冕寧彝海・大橋ダム風景区、⑫瀘沽湖観光開発であった。

## (2) 凉山観光総合計画に見る観光發展戦略

凉山観光総合計画<sup>28</sup>は、凉山彝族自治州の州委と州政府の委託を受けて、四川省旅游規劃設計所が四川省旅游局の指導下で策定したものであり、基本的には『四川省旅游發展总体规划』を推進するための地方計画と定位できる。また現地調査の時点において、『西昌市旅游發展总体规划』(2001年末発表予定)が策定途上にあり、やはりこれも四川省レベル・凉山彝族自治州レベルの観光総合計画の基本路線を踏襲して策定中とのことだった。四川省における観光総合計画は、省レベル、地区・自治州レベル、縣市レベルと行政階層を順に下るトップダウン方式で策定されつつある。なお、凉山観光総合計画は2000年から2015年までの計画であり、2005年までを短期計画、それ以降、2010年までを中期計画、2015年までを長期計画としている。

まずは、凉山観光総合計画において、同自治州内の観光資源がどのように評価されているのか言及しておきたい。凉山観光総合計画ではおおよそ考えつく限りの観光資源が160項目余り挙げられているが、凉山彝族自治州の観光資源の特徴は「兩大風情、一大科技(二つの大きな風情、一つの大きな科学技術)」と概括されている<sup>29</sup>。前者は彝族文化風情と摩梭人文化風情を指し、後者は航空科学技術を指す。凉山彝族自治州内で観光資源として制度化されているものはあまりなく、国家クラスのもの瀘沽湖風景名勝区(雲南省と共同管轄)と美姑大風頂自然保護区のみであり、省クラスのもの螺髻山—邛海風景名勝区(現在国家クラスに昇級申請中)、馬湖風景名勝区、彝海風景名勝区、龍肘山—仙人湖風景名勝区、冕寧冶勒自然保護区が存在する。また、西昌市と会理県は省クラスの歴史文化名城に指定されており、西昌市域の礼州鎮も省クラスの歴史文化名鎮に指定されている。これら以外で他に例を見ない観光資源と言えるのは、凉山彝族自治州奴隸社会博物館・彝海結盟記念館・士林、国家旅游局からAAA評価を得ている西昌衛星發射基地くらいである。なお、同自治州内には野生のジャイアントパンダが100頭ほど生息しているとの報道もあり<sup>30</sup>、エコツーリズムが振興されたならばこれも観光資源となり得よう。

観光客を受け入れる宿泊施設の方は現在建築ラッシュの最中で、正確な数を反映していると考え難いが、凉山観光総合計画のなかでは、民間經營の旅館や邛海周辺などに多数点在する「農

家楽」施設なども含めて7千ベット程度と推計されている<sup>31</sup>。外国人観光客の宿泊も可能な涉外ホテルに限れば、西昌市内に10軒程度、同自治州所轄の各県に1軒から2軒程度存在している。

涼山観光総合計画の基本路線は、「一個中心、三大片区、五条骨干旅游線(一つのセンター、三つの地域、五つの観光ルート)」と標語化されている<sup>32</sup>。一つのセンターとは、西昌市を中心とした涼山観光のゲートウェイ地域を指す。三つの地域には、中部地域・西部地域・東部地域が挙げられている。中部地域は安寧河流域を中心とする生態リゾート観光地域のこと、豊富な日照量・航空科学技術・西昌と普格の彝族文化・安寧河流域の生態農業・螺髻山・邛海などを観光対象として挙げ、2000～2005年の短期計画で重点的に観光開発するとされている。なお、西昌と普格の彝族文化では特に火把節を重視すると明記されている。西部地域は塩源县・木里チベット族自治州を中心とする民族文化・高山生態観光地域で、滄沽湖の摩梭人文化・高山溪谷の探検などが観光対象として挙げられている。東部地域は大涼山彝族地帯の中心地と雷波県からなる彝族文化・生態観光地域を指すが、現時点では全く観光開発がなされていない(表1・図1参照)。

表1 涼山観光総合計画における優先観光開発計画

地域	一級観光地域	二級観光地域	短期	中期	長期	
中部地域	西昌陽光レジャー・会議・航空科学技術観光地域	邛海観光遊覧地域	○			
		邛海陽光レジャー地域	○			
		邛海休日娯楽地域	○			
		滄山文化景観地域	○			
	冕寧県紅軍長征文化・宗教文化・生態観光地域	冕寧県城			○	
		航空科学技術観光地域	○			
紅軍長征文化観光地域		○				
普格県螺髻山生態観光地域	螺髻山鎮	○				
	清水溝一主峰観光レジャー地域	○				
	大槽河温泉・温泉山庄レジャー地域	○				
西部地域	塩源县滄沽湖摩梭人文化保護地域	滄沽湖鎮	○			
		摩梭風情遊覧地域	○			
		草海生態観光地域	○			
		亮海観光遊覧地域	○			
木里県城	高山生態観光地域			○		
	チベット族宗教文化観光地域			○		
	探検観光地域	○				
東部地域	大小涼山彝族文化保護地域	昭覺県城		○		
		彝族第一村		○		
		美姑県彝族文化観光地域			○	
		雷波県彝族文化観光地域			○	
	大小涼山生態・レジャー観光地域	美姑県大風頂生態観光地域			○	
		雷波県馬湖生態・レジャー観光地域				○
		松涛森林公園生態・レジャー観光地域	○			
大小涼山文化観光地域			○			
産業観光地域	水力発電所				○	

注) 図のなかの斜体字の地域は短期計画(2000～2005年)における優先観光開発地域である。  
出所) 『涼山彝族自治州旅游发展总体规划』、2001年、46～47頁より。

五つの観光ルートを選択では、四川省と雲南省の挟まれた涼山彝族自治州の地理的位置を重視して、両省をつなぐルートが重視されている。第一のルートは成都—西昌—攀枝花—昆明で、上記の中部地域を縦に貫き四川省と雲南省を結ぶ民族文化観光ルートと位置づけられている。第二のルートには、成都—西昌—航天城—塩源—瀘沽湖（以上は四川省）—麗江—大理—攀枝花—昆明—大理—麗江—中旬（以上は雲南省）—塩源—瀘沽湖—西昌—航天城の二本が挙げられており、四川省と雲南省の民族文化と生態観光を堪能できる黄金観光ルートとされている。現在雲南省は三江並流地区・瀘沽湖およびその周辺のチベット族地帯をユネスコ世界自然遺産に申請する準備を進めており、このルートはそうした動向を見据えての選択であろう。第三のルートは宜賓—馬湖—溪洛渡—美姑—大風頂—峨邊—黒竹溝—楽山の生態観光ルートで、四川観光総合計画における四大優先観光開発地域と涼山彝族自治州とのリンクを試みるルートである。第四のルートは西昌—昭覺—雷波—溪洛渡—寧南—華彈—会理—徳昌—西昌をつなぐ民族文化・生態観光ルートであり、これは上記の東部地域を横断している。第五のルートは成都—冕寧—西昌—螺髻山—成都といった陽光リゾート観光ルートで、中部地域の最も著名な観光地をつないでいる。

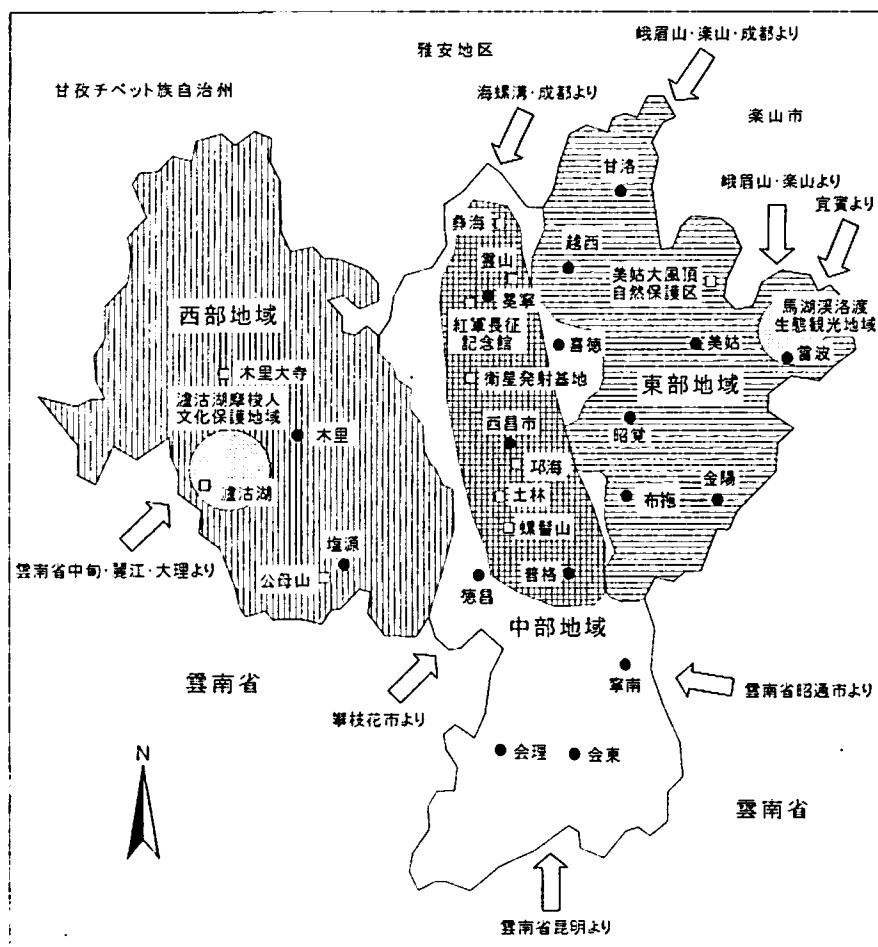


図1 涼山観光総合計画図(2000~2015年)

出所)『涼山彝族自治州旅游发展总体规划』,2001年、43頁掲載の図を筆者が書き直した。

表2 涼山観光総合計画における発展数値目標

主要な指標		2000年	2005年	2010年	2015年
国際観光	観光客数(万人回)	0.491	1.552	3.383	6.578
	平均宿泊日数	1.5	1.7	2.0	3.0
	一人当たりの消費(\$/日)	124	148	192	240
	観光外貨収入(万\$)	91.37	390.36	1,301.20	4,736.39
国内観光	観光客数(万人回)	229.83	338.01	396.95	697.67
	平均宿泊日数	1.8	2.0	2.5	3.0
	一人当たりの消費(元/日)	100	115	171	216
	観光収入(万元)	40,220	77,760	169,200	452,088
観光総収入(万元)		40,979	81,000	1,800,000	491,400
対GDP比率(%)		4	6	10	15

出所)『涼山彝族自治州旅游发展总体规划』、2001年、48頁より。

涼山観光総合計画では四川観光総合計画と同じく、四大優先観光開発地域も絞り込まれており、短期計画(2000～2005年)の戦略として、「加強中心、打通西線、培育東線(センターを強化して、西行ルートを通し、東行ルートを育成する)」が提案されている<sup>33</sup>。第一の優先観光開発地域は西昌陽光レジャー・会議・航空科学技術観光地域で、これはほぼ西昌市域の観光開発と重なるので後に詳述したい。第二は塩源瀘沽湖摩梭人文化保護地域であり、瀘沽湖周辺の環境に配慮して摩梭人の伝統文化を保護しつつ、持続可能な観光開発を目指している。具体的な計画としては、西昌から瀘沽湖までの260kmの道路整備を実施する「打通西線工程」、摩梭人の伝統文化を展示する施設の建設を目的とする「摩梭文化展示工程」、瀘沽湖観光のゲートウェイとなる瀘沽湖鎮に観光インフラの整備を試みる「瀘沽湖鎮建設工程」、野鳥や渡り鳥が集う瀘沽湖の低湿地帯の保全を試みる「草海回復工程」、瀘沽湖およびその周囲の環境保全を試みる「生態環境保護工程」といった五大工程が掲げられている。第三の優先観光開発地域は普格県螺髻山生態観光地域であり、古代氷河地形が刻まれ未開発の自然が残る螺髻山とその周辺に湧き出る温泉を中心に据えている。具体的な計画では、まず螺髻山の登山口にあたる螺髻山鎮の観光インフラを整備して(「螺髻山鎮工程」)、螺髻山鎮から螺髻山山頂に至る地域にロープウェイやホテルを備えた観光レジャー区を建設し(「索道工程」・「大海子度假区工程」・「珍珠湖一姐妹湖観光工程」)、螺髻山の山中に湧き出る温泉を利用した温泉レジャー区を建設すること(「温泉工程」)が挙げられている。第四の優先観光開発地域は冕寧県紅軍長征文化・宗教文化・生態観光地域であり、彝海結盟と紅軍長征記念館を中心に紅軍長征文化観光地域を形成し、靈山寺と靈山森林公園を中心に宗教・生態観光地域を形成することが計画されている。

五つの観光ルートと上記の四大優先観光開発地域を見ると、涼山彝族自治州の観光発展戦略は、とりわけ短期計画において観光投資の地域的分散を防止すべく、西昌市・塩源県・普格県・冕寧県に絞り込まれたと言えよう。なお、涼山観光総合計画は具体的な目標数値も掲げており、GDPに占める観光総収入の比率を2000年現在の4.1%から、2005年までに6%へ、2010年までに10%へ、2015年までに15%へと引き上げるとされる。2015年までの五年毎に観光客数の発展目標も定められている(表2参照)。また、国内観光市場への売り込み戦略としては、第一に成都周辺・攀枝花市・重慶市・宜賓市・涼山彝族自治州など省内・州内市場、第二に昆明・西安・貴陽など四川省に近い大都市、第三に東部沿海地域の大都市、と三段階に想定して、陽光レジャー・航

空科学技術観光・民族文化をプロモーションしていく方針である。一方、国際観光市場に関しては、第一に香港・マカオ・台湾・海外華僑など中国系同胞を据え、第二に日本・韓国・シンガポール・マレーシアなどのアジア市場、第三に北米・ヨーロッパ市場、と同じく三段階に売り込み先を想定して、民族文化と生態観光をプロモーションしていく方針が掲げられている。

#### 4. 西昌市における観光開発の現状

##### (1) 西昌市域における観光開発計画

凉山観光総合計画で西昌市は凉山州観光のゲートウェイとしての役割を期待され、短期計画において重点的に観光投資されることになっている。まずは凉山観光総合計画において、西昌市域でどのような観光開発が計画されているのか確認しておきたい。凉山観光総合計画で四大優先観光開発地域の筆頭に挙げられた西昌陽光レジャー・会議・航空科学技術観光地域では、西昌市域を五つの観光地域に区分して六つの工程を実施する計画が立案されている(図2参照)。

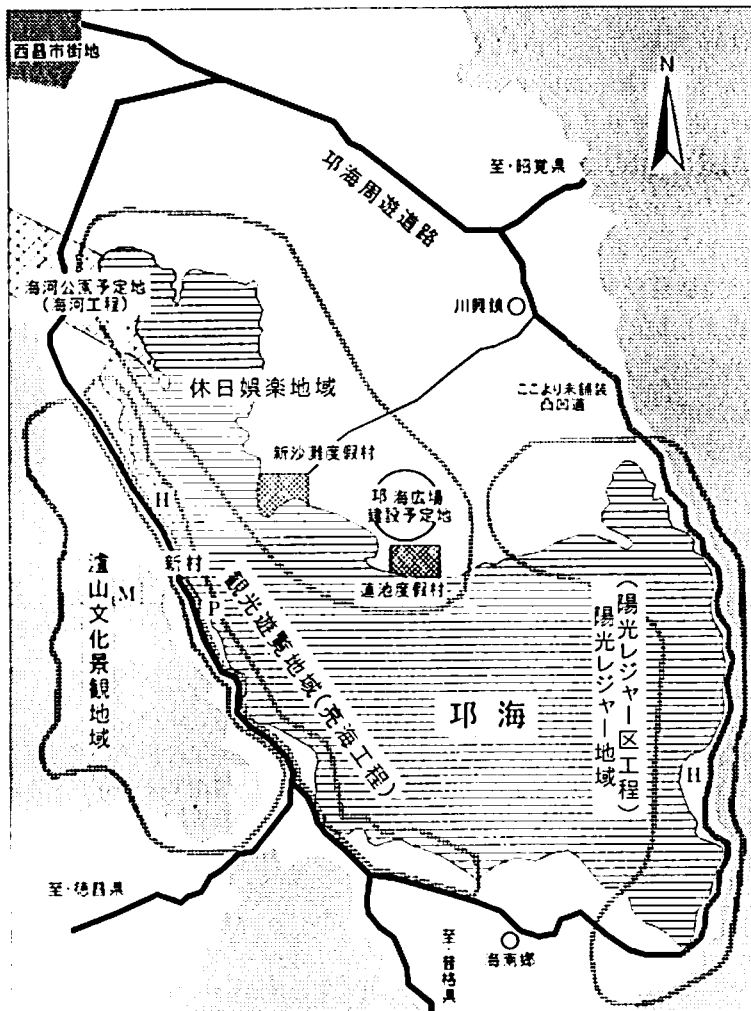


図2 西昌市邛海周辺における観光開発計画

出所) 凉山州民族自治州旅游发展总体规划, 2001年, 101頁掲載の図を筆者が書き直した。



第一の「観光遊覧地域」は邛海公園(図2のP)や邛海賓館(図2のH)の立地する邛海西岸一帯で、邛海湖畔の景観を整備する「亮海工程」、既存の邛海公園の拡充、邛海周遊道路の整備などが計画されている。邛海西岸の周遊道路沿いの一帯は新村と呼ばれており、1990年代半ば以降、主に国内観光客を対象としたレストラン・娯楽施設・宿泊施設(「農家楽」)が先を争うように立地し始め、湖畔の景観を損なっているばかりか、生活廃水などで邛海の汚染を招いていると批判されてきた。「亮海工程」はこうした粗悪な観光施設を全て撤去して、邛海賓館と邛海公園を中心として湖畔遊歩道を整備して景観の修復を試みる計画であり、六つの工程のなかでも最優先課題とされ、2003年末までに完成させる予定である。撤去対象となる観光施設の移転先としては、後述する海河公園内に建設予定の涼山州旅游貿易中心の一角が提供されることになっている。

第二の「陽光レジャー地域」には邛海東岸一帯が指定されており、遊泳場・スポーツ施設・ホテル・高級別荘地などを建設する「陽光レジャー区工程」が計画されている。現在、邛海東岸には海濱賓館(図2のH)が立地しているくらいで観光開発は未着手状態にあり、邛海周遊道路が整備されていないため、訪れる観光客もほとんどいない。

第三の「休日娯楽地域」は邛海北岸の新沙灘度假村・蓮池度假村から邛海西北岸の海河河口一帯で、邛海広場を建設する「邛海広場工程」、邛海に流れ込む海河の整備と護岸工事を実施する「海河工程」が計画されており、海河兩岸一帯に涼山州旅游貿易中心が建設される予定である。なお、この涼山州旅游貿易中心に後述する涼山民族風情園が建設されることになっている。

第四の「瀘山文化景観地域」では、瀘山山中の寺院や涼山彝族奴隸社会博物館(図2のM)を中心とする文化景観の保全を最大の目的とし、文化景観を損なうような観光関連施設の建設を一切禁じることになっている。第五の「航空科学技術観光地域」(図2の範囲外)では、西昌衛星発射基地を中心として航空展覧館を建設するという「航空科学技術観光地域建設工程」が計画されている。以上五つの観光地域のいずれにおいても、邛海や瀘山の汚染を防止する「環境保護工程」が別立てで強調されている。

西昌市域の観光開発においても、観光資源の土地所有権と開発経営権を分離して後者を売却する手法で中国内外に広く投資の誘致を呼びかけられている。2001年の西昌市投資誘致項目は表3に示したが、海河公園とその内部に建設予定の施設が目立つ。

表3 2001年度西昌市観光関連投資誘致項目

投資誘致項目名	投資誘致総額(万元)	投資誘致項目名	投資誘致総額(万元)
火把広場建設(海河公園内)	5,280	中国航天城旅游度假山庄建設	997
中国西昌航天城会展中心建設(海河公園内)	4,000	瀘山索道建設(邛海西岸)	700
青少年活動中心建設(海河公園内)	1,500	瀘山森林公園建設(邛海西岸)	5,000
河東片区旧城改造(海河公園内)	29,260	涼山民族風情園建設(海河公園内)	3,000
温泉賓館建設(市区より5km)	5,000	螺髻山公路整備(西昌一番格間)	160
月城休閒広場建設(州体育館付近)	11,918	仙人洞建設	800
航天城當盤山旅游度假村建設	5,850	人造陽光沙灘建設(邛海東岸)	1,000
海河公園建設	500	瀘山遊歩道整備(邛海西岸)	60

注) 括弧内の情報は筆者が書き加えた。

出所) 航天城報2001年8月10日付けの記事「西昌市2001年招商引資項目目錄」より抜粋。

## (2) 民族テーマパーク・凉山民族風情園

既述したように凉山観光総合計画において「海河工程」の実施が決まり、2001年夏現在、邛海西北岸の海河河口から成昆鉄道までの海河沿いで、海河公園を建設するための整地と護岸工事が進行中であった(図2・写真1参照)。

海河公園内には、邛海から国道108号線までの地域に魚釣倶楽部・大型植物園・青少年活動中心などの娯楽施設が、国道108号線から東河までの地域に大凉山彝族文化を集中的に展示する凉山民族風情園と凉山民族体育文化センターが、東河から西河までの地域に航空科学技術展覧館が、西河から長袁路(成昆鉄道沿い)までの地域に商業機能付きの都市近郊型マンション群が建設され、長袁路から安寧河までの一帯では緑化が推進される予定である<sup>34</sup>。

海河公園内に建設予定の施設の多くは、2002年の凉山彝族自治州設立50周年記念にあわせて開業される予定である。しかしながら、2001年夏に建設予定地を見た限りでは、まだ整地段階にありとても間に合いそうにない。なかでも、凉山民族風情園では自治州成立50周年記念式典が行われる予定で、2001年3月に同州の11県市の首脳を集めて凉山民族風情園建設協調会も設立されている<sup>35</sup>。西昌城南開発区の健康南路と海河が交差する一帯に建設予定の凉山民族風情園には、大凉山彝族文化を中心としてチベット族文化や摩梭人文化も展示されることになっており、計画用地面積にして49,878平方kmもある大規模な施設である。凉山民族風情園の建設では、普格豪吉集団・木里第一林場・昭覚電力公司・布施電力公司・金陽電力公司・美姑電力公司など、同州11県市の企業が出資する西昌凉山民族風情園有限責任公司が設立されている<sup>36</sup>。

凉山民族体育文化センターは凉山民族風情園に隣接して建設され、やはり自治州50周年記念にあわせて開業予定である。なお、凉山民族風情園の建設資金3,000万元は四川省方式で出資が募られたものの応募は無く、結局のところ州委と州政府の強力なバックアップのもと、「異地扶貧」と称される開発方式がとられている。凉山彝族自治州所轄の10県は国定貧困県に指定されており、この開発方式はそうした貧困県へ拠出される扶貧(貧困撲滅)資金から、一県あたり300万元の合計3,000万元を捻出するもので、西昌市の発展なくして貧困からの脱却なしという論理である。

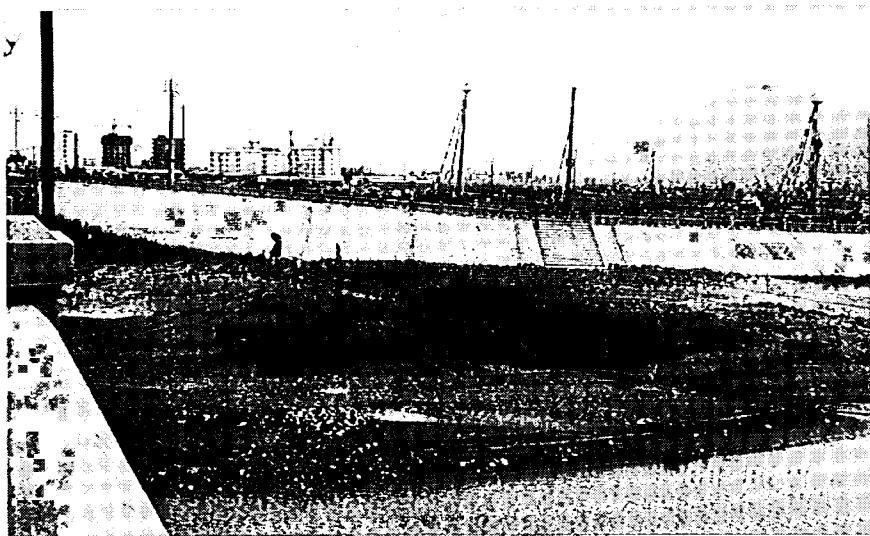


写真1 凉山民族風情園の建設予定地

### (3) イベント化される火把節

火把節は雲貴高原に居住するチベット・ビルマ語系諸民族の間で広く行われている年中行事であり、一般に旧暦6月24日か6月25日から始まる。なかでも雲南省のバイ(白)族・彝族・サニ族の火把節はすでに民族観光対象として中国内外での知名度も高い。涼山彝族自治州は中国でも最大の彝族集住地帯であり、伝統的な火把節は旧暦6月24日から彝族の各集落などで盛大に行われてきた。しかしながら、元来より彝族人口の少ない西昌においては、山間部の彝族集落で火把節は行われていたものの、市域で行われることは無く、それに行政が介入することも無かった。西昌市域において火把節が行われるようになったのは、1978年10月に西昌地区と涼山彝族自治州が合併して、州都が昭覚県から西昌県(1979年7月に市制移行)に移転して以降のことであり、西昌市人民政府もしくは涼山彝族自治州人民政府主催の火把節が行われるようになった。

火把節が観光プロモーションと連動して大々的に開催されるようになった最初は、1994年中国涼山彝族国際火把節であった。自治州政府が主催する中国彝族国際火把節はこれまで1997年・2000年と過去三年毎に開催されている。2000年中国涼山彝族国際火把節は、「樹涼山旅游斬新形象、創涼山旅游馳名品牌」・「以開明促開放、以開放促開發、以開發促發展」・「敞開大門、廣交朋友、擴大對外開放、振興涼山經濟」といったスローガンのもとで開催された<sup>37</sup>。この火把節では、涼山州の各県市から集結した様々な彝族の支系が西昌市内をパレードし<sup>38</sup>、「人寿保險杯」と銘打った彝族式レスリング大会や「西昌電力杯」と銘打った彝族の美男美女コンテストなど様々なイベントも開催された。2000年中国涼山彝族国際火把節旅游工作總結会では、2000年7月20日から30日までに3.8万人余りの観光客が西昌市を訪れ、観光収入は1,700万元余りに達し、西昌近郊の主要な観光スポットにはこの期間中に8.7万人余りが訪れたと発表されている<sup>39</sup>。

三年毎の中国涼山彝族国際火把節は涼山彝族自治州人民政府主催で開催されてきたが、それ以外の年は西昌市人民政府主催で開催されている。例えば、2001年夏は、2001年中国涼山彝族火把節と「国際」の二文字が抜けて、8月12日から約1週間にわたり西昌市内で様々なイベントが開催された。この年の火把節では成都市近郊の温江県にも分会場が設けられ、涼山彝族自治州の火把節の存在を四川省人民に宣伝すべく、西昌市政府・温江県政府・成都市文聯などの主催で、8月12日から18日まで同じようなイベントが行われた<sup>40</sup>。

筆者は2001年中国涼山彝族火把節の開幕式を見学する機会を得た。開幕式の会場は西昌市中心部の人民広場で、8月12日の午前9時から10時半くらいまで行われた(写真2・写真3・写真4参照参照)。会場の中央にはたいまつを灯す聖火台が設置され、会場正面の貴賓席には四川省・涼山彝族自治州・同州所轄各県の党・政府首脳たちが陣取り、観覧席一帯には「努力把西昌建設成為優秀旅游城市」などといったスローガンが数多く掲げられていた。会場には涼山彝族自治州の各地各支系の盛装した彝族男女と西昌市民が動員されていた。貴賓席から降り立った政府首脳たちが聖火台に点火すると同時に、絶叫気味に火把節の開幕が宣言され、彝族と西昌市民による群舞が次から次へと繰り広げられた。涼山彝族自治州自治条例の第75条によると、「自治州の自治機関は各民族の伝統的な節日を尊重する。毎年旧暦6月24日を火把節として、民族団結に有利となる節日活動を展開する。」と規定されている。彝族の群舞のなかには、解放以前の彝族の家支間抗争や階級対立を乗り越えて、民族団結を勝ち取っていく様子をテーマにしたものもあった。行政側が主催する火把節は、観光客誘致を目的としたイベント化が進むと同時に、彝族が政府首脳の前で民族団結を誓い、その様子を西昌市民や観光客に見せるという政治的スペクタクルの場として定着しつつあるようだ。



写真2 2001年中国凉山彝族火把節開幕式の式場



写真3 貴賓席に掲げられたスローガン



写真4 凉山各地から来た彝族たち

華々しく開幕した2001年中国凉山彝族火把節ではあったが、観光産業に対する経済効果は期待していたほど芳しくなかったようである。中国国内の新聞に批判記事が掲載されるのは異例のことだが、火把節の期間中でさえ西昌市内のホテルの客室稼働率も普段とさほど変わらぬ20%から30%にとどまり、観光産業にもたらした経済効果は「惨澹」たるものであったと酷評されている<sup>41</sup>。同州観光業界によるとその要因は、温江県に分会場を設置したため観光客が分散し、火把節の開催期間が法定の休日と異なるため外部からの観光客に認知されておらず、外部から西昌市への交通アクセスが依然と改善されていないためだと分析されている。

行政主催のイベント化された火把節で観光客を誘致する試みは西昌市だけにとどまらず、彝族人口が多く彝族比率も高い普格県や布拖県などでも行われており、凉山彝族自治州の各県でも検討されつつある。なかでも普格県は凉山観光総合計画に先んじて、1990年代後半より民族観光開発に取り組んできた。

普格県の観光発展戦略は「一山(螺髻山)、両泉(螺髻山温泉瀑布・螺髻山温泉山庄)、一海(螺髻山海口牧场)、一風情(彝族風情)」で、螺髻山と彝族文化を全面に押し出して、県域内部の観光スポットと観光ルートの整備に取り組んできた<sup>42</sup>。観光開発関連の投資誘致総額も契約ベースで2001年に1億元を突破した<sup>43</sup>。県城西側の山中には尖尖民族文化広場がすでに整備されており、省委・州政府主催の2001年普格県旅游火把節の開幕式は同年8月10日にここで開催された。開幕式当日の尖尖山民族文化広場には、「満天星開輝映螺髻、天上人間畜飲茶；旅游興県開發資源、經濟文化共騰飛」の垂れ幕が掲げられた<sup>44</sup>。同年の火把節は8月12日まで、県城新建北路に建設された螺髻山民族風情園<sup>45</sup>、その道路向こうに建設された螺髻山温泉山庄(1997年7月開業)、螺髻山の登山口にあたる螺髻山鎮<sup>46</sup>などで、闘牛・闘羊・闘鶏・競馬・彝族式レスリング大会・達体舞大会・彝族美人コンテストなど様々な賞金付きのイベントが催された。『凉山日報』には7月半ばから2001年普格県旅游火把節の新聞広告が、「建旅游大県、樹旅游形象」の標語とともに毎日のように掲載され、国内観光客や州内観光客への宣伝が行われた。布拖県でも「火把的故郷、火把節的發源地」を謳い文句に、2001年7月18日から21日までの4日間、省委と州政府主催の2001年布拖県火把節が様々なイベントとともに開催された。

2001年夏に行政主導で実施された西昌市・普格県・布拖県の火把節の開催日程を見ると、西昌市では伝統的な火把節の期間に開催されており、他の二県はそれと互いに日程が重ならないよう配慮されている。これは潜在的に集客力の高い夏休み中に、日程をずらして各地で火把節を開催することにより、より多くの国内観光客を呼び入れようとする試みと考えてよからう。

以前は旧暦6月24日から凉山彝族自治州の各地で一斉に行政主導の火把節が祝われていたが、2001年度の日程調整は思わぬ効果ももたらした。従来から行政主導で開催される火把節には、様々な批判が浴びせられてきた。批判の焦点は大きく二つある。第一は、行政主導の火把節は高いコストがかかるけれども、それに見合った経済効果が得られないとの批判である<sup>47</sup>。第二は、行政主導の火把節は大規模化・イベント化し過ぎたため、従来から彝族民衆の行ってきた伝統的な火把節との乖離が生じて、彝族民衆が積極的に参与しなくなりつつあるとの批判であった<sup>48</sup>。ところが2001年の普格県や布拖県の場合は、伝統的な火把節の開催期間とずれて開催されたため、動員された以外の彝族民衆も行政主導の火把節にはイベントとして気軽に参加して、本来の火把節は地元集落など小規模な単位で従来どおり行った。つまり、イベント化された行政主導の火把節と、小規模ながらも民族色に溢れる従来の火把節が並存できたことになる。行政主導の火把節は民族観光資源を宣伝する場としては確かに有益であるが、民族観光資源そのものとしてはむしろ民

族色に溢れる伝統的な火把節の方が重要であり、今後ともこの両者が並存できるような環境を整える必要がある。

#### 4. 西昌市における観光開発の課題—おわりにかえて—

涼山観光総合計画が策定されて以降、西昌市内では海河公園建設を初めとする観光開発ラッシュに沸いている。最後に西昌市における観光開発をめぐる課題を提示しておわりにかえたい。

第一の問題は、観光資源の開発経営権を売却する四川省方式の観光開発に関わる。西昌市郊外の松涛森林公園(昭覚県管轄)と邛海湖畔の蓮池度假村は、西昌東方航天旅游有限公司が中心となって、開発経営権を取得して開発した観光スポットで、前者は1997年、後者は1994年に開業している<sup>49</sup>。ところが、2001年夏の時点で、両者は観光関連のパフレットやガイドブックで紹介されているにも関わらず、開店休業状態にあった(写真5参照)。同会社は1990年代半ばから涼山彝族自治州各地の観光開発を手広く行ってきたが、現在では資金繰りに困窮しており、この両者に限っても完成してわずか数年で施設は荒れ放題となり、観光スポットとしての再生はもはや不可能に近い。涼山観光総合計画は策定されて間もないにもかかわらず、数多くの観光開発プロジェクトがすでに着工されている。そのなかには、半ば投機目的の乱開発につながる事例も少なからず存在していると思われる。大規模な観光開発プロジェクトが多いただけに、途中で放置されたり失敗したりすればその影響は計り知れない。今後は個々のプロジェクトを厳しく管理し、乱開発につながる開発を防止することが大きな課題となろう。

第二の問題は、涼山観光総合計画の観光開発プロジェクトにハード面の整備、なかでもいわゆるハコ物建設が目立つことにある。例えば、涼山民族風情園を建設するにしても、そのなかによどのような民族文化をどのように展示するのかといったソフト面の議論はほとんどなされていない。大涼山彝族自治州の奴隷制度にしても、瀘沽湖摩梭人の走婚制度や母系大家族社会にしても、展示の仕方を誤れば民族偏見を増長させて固定させかねない問題を含んでおり、少数民族側からクレームがつく事態も予測される。雲南省の民族観光開発は十数年にわたる経験のなかで、少数民族側から民族観光開発に参入する機運が熟したうえで、ハード面が整備されてきたので一定の成功をおさめてきた。しかしながら、涼山彝族自治州における民族観光はまだ萌芽段階にあり、いきなり経験蓄積の豊富な雲南省を見習ってハード面の整備だけが先行しても、行政主導の火把節のところで若干紹介したように、少数民族側は困惑して心理的距離をおきかねない。

最後は涼山彝族自治州観光のイメージをめぐる問題である。既出のガイドブック『地球の歩き方104:雲南・四川・貴州と少数民族 2000～2001年版』の西昌の項では、「最後に一言注意しておく。このエリアでは最近、強盗事件が多発しているの、1人でふらふら田舎を歩くことはやめよう。」と、まさに異例の忠告が添えられている。また、西昌市内やその近郊では、大量の国内観光客が押し寄せる火把節にあわせて、周到な計画や準備もなく、たとえ建設途上にあっても営業を開始するような観光施設が非常に多い。こうしたいわば火把節の「特需」を当て込んだ観光施設のなかには、観光客にまともなサービスを提供する能力もノウハウもなく、特需が過ぎればたちまち粗悪で不良な観光ストックと化するものが少なくない。観光客は質の悪いサービスに不満をつのらせ、乱立する観光施設は過当競争に陥り共倒れの危機に瀕するといった悪循環がここ数年間続いている。いづれにしても、観光客の脳裏にマイナスイメージが刻み込まれてしまうと、それを払拭するのは極めて困難な作業となるので、何らかの対策を講じる必要がある。



写真5 開店休業状態の蓮池度假村

<sup>1</sup> 四川日報 2000年3月1日付け記事「背景資料四川旅游资源概況」より。本稿で引用する新聞記事は、断りのない限りインターネットで検索して得た Web 版である。また、本稿における記事名や法律・標語名は中国語表記のままとし、一部には訳注を付けた。

<sup>2</sup> 四川日報 2000年11月26日付けの記事「旅游区等级评定工作开始我省已向国家推荐首批10家AAAA级、6家AAA级旅游区」より。1997年に四川省から重慶市が分離したため、AAAA・AAAともに今では重慶市管轄になっているものもある。本稿では重慶市管轄分は含めていない。

<sup>3</sup> 国際観光統計は、国家旅游局のホームページ(<http://www.cnta.com/23-dfly/2j/sc-1.asp>)から得た。

<sup>4</sup> 四川省では2000年から2001年にかけて対外開放都市が急増したが、その詳細はわからない。

<sup>5</sup> 国内観光統計は国家旅游局のホームページ(<http://www.cnta.com/23-dfly/2j/sc-2.asp>)から得た。

<sup>6</sup> 四川日報 1999年4月26日付け記事「加快培育旅游支柱产业」より。

<sup>7</sup> この概要は、<http://www.travelsichuan.com/knowledge/Plan.htm> で公開されている。

<sup>8</sup> 四川日報 2001年2月22日付けの記事「旅游资源富集的四川开始了“政府主导，企业运作”的旅游业发展战略：十大景区“抛绣球”」より。

<sup>9</sup> 四川日報 2001年4月3日付けの記事「四川“推销十大景区”做成第一笔生意 四姑娘山经营权20亿成交」より。

<sup>10</sup> 凉山州人民政府地方志办公室編『凉山年鉴(1999)』、四川人民出版社、2000年、147頁。

<sup>11</sup> 凉山日報 2000年5月1日付けの記事「凉山州统计局1999年国民经济和社会发展统计公报」より。

<sup>12</sup> 凉山日報 2000年4月10日付けの記事「政府工作报告：2000年3月26日在凉山彝族自治州第七届人民代表大会第六次会议上」より。

<sup>13</sup> 凉山日報 1999年9月6日付けの記事「美姑开发旅游资源大有可为」より。

<sup>14</sup> 四川日報 2000年9月7日付けの記事「联手构建大西南“黄金旅游圈” 六省市区七方达成旅游合作协议」より。

<sup>15</sup> 瀘沽湖周辺の民族観光開発に関しては別稿で論じたので、参照していただきたい。拙稿「女の国」で村おこし—瀘沽湖観光開発の現状と課題—、自然と文化 第69号、2002年、32-39頁。

<sup>16</sup> 凉山日報 1999年8月23日付けの記事「培育壮大凉山旅游业」より。

<sup>17</sup> 凉山日報 1999年8月30日付けの記事「开发凉山旅游业的布局设想」より。

<sup>18</sup> 凉山日報 2000年10月23日付けの記事「发展凉山旅游业的关键——突出地方特色增强文化内涵」より。

<sup>19</sup> 凉山日報 1999年12月31日付けの記事「凉山旅游对西部开发说：走，到凉山去！」より。

- <sup>20</sup> 凉山日報 1999年11月4日付け記事「《凉山州旅游发展总体规划》编制工作启动会在昌召开编好规划推出凉山旅游品牌」より。
- <sup>21</sup> 凉山日報 1999年12月24日付けの記事「“凉山州旅游发展总体规划”实施野外考察」より。
- <sup>22</sup> 凉山日報 2000年2月17日付けの記事「州人民政府举行旅游文化座谈会 突出彝族文化突出地域优势 我州党政领导骆玉祥、张作哈等和文化界专家畅谈凉山旅游形成共识」より。なおこの後に、塩源县瀘沽湖鎮に摩梭人の伝統文化を展示する「摩梭人風情園」（民族テーマパーク）を建設し、木里チベット族自治州にもチベット族のものを建設すべきだと提案されている。凉山日報 2000年4月5日付けの記事「开发凉山旅游文化 领略独特民族神韵」より。
- <sup>23</sup> 凉山日報 2000年7月13日付けの記事「旅游兴州创新强州发展富州 《凉山州旅游发展总体规划》通过初审」より。
- <sup>24</sup> 凉山日報 2000年12月7日付けの記事「骆玉祥在全州旅游工作会议上指出 加快培育旅游支柱产业 努力建设旅游经济强州」より。
- <sup>25</sup> 凉山日報 2000年12月9日付けの記事「勾画凉山旅游」より。
- <sup>26</sup> 凉山日報 2001年1月16日付けの記事「加强合作共谋发展 川滇五市地州缔结经济合作」より。
- <sup>27</sup> 凉山日報 2001年2月15日付けの記事「凉山旅游：开出招商引资“新菜单”」より。
- <sup>28</sup> 四川省旅游规划设计院編『凉山彝族自治州旅游发展总体规划』、2001年4月刊行。
- <sup>29</sup> 前掲『凉山彝族自治州旅游发展总体规划』、9-11頁。
- <sup>30</sup> 凉山日報 2001年5月14日付けの記事「我州加强自然保护区野生动物管理」より。
- <sup>31</sup> 邛海周辺の農家菜の立地展開に関しては、別稿にて論じる予定である。
- <sup>32</sup> 前掲『凉山彝族自治州旅游发展总体规划』、42-44頁。
- <sup>33</sup> 前掲『凉山彝族自治州旅游发展总体规划』、95-130頁。
- <sup>34</sup> 凉山日報 2000年1月3日付けの記事「西昌将建城中“桃花源”」および凉山日報 2001年7月15日付けの記事「装点西昌」より。
- <sup>35</sup> 凉山日報 2001年3月7日付けの記事「建设一个对外宣传的好窗口 凉山民族风情园建设启动」より。
- <sup>36</sup> 凉山日報 2001年3月21日付けの記事「凉山民族风情园业主敲定 豪吉集团总裁严俊波出任公司董事长」より。
- <sup>37</sup> 凉山日報 2000年7月17日付けの記事「燃千年不熄火把展凉山奋进风采 一王文远就州委、州政府举办2000年中国凉山彝族国际火把节答记者问」より。
- <sup>38</sup> 凉山日報 2000年7月15日付けの記事「火把节的开场戏一化妆游行」より。
- <sup>39</sup> 凉山日報 2000年8月14日付けの記事「州旅游局召开总结会 火把节期间接待游客八万七千多人」より。
- <sup>40</sup> 凉山日報 2001年7月25日付けの記事「凉山火把照温江」より。
- <sup>41</sup> 凉山日報 2001年8月19日付けの記事「火把節、烧不旺凉山旅游业」より。
- <sup>42</sup> 凉山日報 1999年12月16日付けの記事「变旅游资源优势为经济优势 普格县加快发展旅游业」より。観光ルートには、①普格县城—螺髻山鎮—螺髻山頂、②普格县城—日敢阿都土司府遺跡—螺髻山温泉瀑布、③普格县城—螺髻山海口牧場—海口尊母石刻、④普格县城—西普電所—瑪瑙洞—日都地散火把節娛樂場、⑤普格县城—小興場濮人大石墓群—瓦打洛新石器遺跡—火山仙人洞、⑥普格县城—大坪坎泉水—陰陽岩—輝隆則宗大菩薩画—支格阿魯鍋庄遺跡の六ルートが挙げられている。
- <sup>43</sup> 凉山日報 2001年6月7日付けの記事「普格旅游引资破亿」より。内訳は、螺髻山温泉山庄に1,300万元（成都盛祥公司）、螺髻山客運索道工程に3,000万元（成都盛祥公司）、螺髻山園林式度假中心に3,000万元（成都双流東興房地產開發公司、未着工）、螺髻山温泉瀑布に3,000万元（貴陽陝谷公司、第一期工事は2001年3月着工、同年10月開業予定）、螺髻山高原海口牧場に1,000万元、螺髻山彝族風情園に500万元、螺髻山民族文化広場に350万元、灯光球場に150万元となっている。
- <sup>44</sup> 凉山日報 2001年8月13日付けの記事「普格2001年螺髻山旅游火把節紅紅火火」より。
- <sup>45</sup> この施設の従業員はほとんどが地元の彝族で、レストラン・宿泊・民族舞踊などを顧客に提供し、「天天都是彝族人、天天都過火把節」を売りに開業したとされる。凉山日報 2001年7月27日付けの記事「螺髻山彝族風情園独樹一旗」より。ただし、2001年8月段階でほとんどの施設はまだ建設中であった。
- <sup>46</sup> 螺髻山鎮は従来、拖木溝区という地名であったが、観光地イメージを強化するために1999年末に改名された。凉山日報 1999年11月11日付けの記事「螺髻朝陽 普格县发展旅游业写意」より。また、螺髻山鎮には彝族風情街を建設する計画もあるが、2001年夏現在、建設は未着手状態であった。
- <sup>47</sup> 例えば、凉山日報 2000年8月22日付けの記事「火把节利弊之争」など。
- <sup>48</sup> 例えば、凉山日報 2000年8月24日付けの記事「火把节要突出公益性与经营性」など。伝統的な火把節の期間と重なった西昌市内の火把節のイベントでは、動員されたらしき彝族以外、ほとんど彝族民衆の姿は見かけなかった。西昌市郊外の彝族民族観光村候補地である四合郷・大箐郷では、市内でのイベントなどに住民はほとんど参加せず、地元の伝統的な火把節の会場（火把場）で祝った。
- <sup>49</sup> 中国語のガイドブック阿卓哈布・王万金主編『凉山風景独好』、四川人民出版社、1997年より。